

日時：二〇一〇年七月三十一日～八月一日土曜・聖日一、二
聖書箇所：エレミヤ書一章四～一〇節

主題『主の召しに応える』

説教者：藤林いざや師 今井直喜師

メッセージ・メモ

14 主の言葉がわたしに臨んだ。

5 「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」

9 わたしは言った。

「ああ、わが主なる神よ。わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから」

7 しかし、主はわたしに言われた。

「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ、遣わそうとも、行って、わたしが命じることをすべて語れ。8 彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」

と主は言われた。6 主は手を伸ばして、わたしの口に触れ、主はわたしに言われた。

「見よ、わたしはあなたの口に、わたしの言葉を授ける。」

10 見よ、今日、あなたに、諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」

(聖書講解)

A (前半のまとめ) エレミヤに主の言葉が臨んだ時、思わず本音が吹き出て来る。エレミヤの()には、学問的素養が不足している上に、社会的経験の未熟さゆえ、主の預言者にはふさわしくないといい思いがあった。

B (後半 のまとめ) 主なる神は、エレミヤに対して、社会() ()に乏しいことを嘆くのではなく、主に遣わされた者という自覚を持つように励ます。

C (後半 のまとめ) 更に、学問的() ()によらず、主が託された言葉、預言を人々に伝えていくのだという働き、つまり主から託された言葉という権威を身に帯びる自覚を持つように励ました。

D (結論) 主の働きは、徹頭徹尾人間的な資質や技量、常識を越えて、主の() ()によって進められるものである。

自分は（ ）（ ）
だと言いつけては
ならない。

参照) 士師記の14 主は彼の方を向いて言われた。「あなたはその力をもって行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる。わたしがあなたを遣わすのではないか」

主の言葉と（ ）（ ）
が託されていることを自覚しよう。

参照) エレミヤ書16 主は手を伸ばして、わたしの口に触れ、主はわたしに言われた。
「見よ、わたしはあなたの口に、わたしの言葉を授ける。
10 見よ、今日、あなたに、諸国民、諸王国に対する
權威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」